

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：11201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2016

課題番号：25884002

研究課題名(和文)19世紀半ば旧ポーランド=リトアニア領におけるネイション:垂直的拡大と領域的縮小

研究課題名(英文)The Transformation of Nations in the Former Polish-Lithuanian Commonwealth in the Middle Nineteenth Century: the Vertical Extension and the Horizontal Reduction

研究代表者

梶 さやか(Kaji, Sayaka)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：70555408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近世の多民族複合国家ポーランド=リトアニア共和国が4つの近代ネイションに分かれる過程で、貴族主体のネイションが下位身分に垂直的に拡大する一方、民衆言語に応じて領域的・水平的に縮小したネイションが登場する点を検討した。共和国再興を目指す1830-31年の十一月蜂起と1863-64年の一月蜂起における声明や動員方法、その間のリトアニアやベラルーシの地域主義的活動の分析から、垂直的拡大は不可逆的あるいは均一に進んだわけでないが、非ポーランド語話者も含めた下位身分へのネイションの拡大傾向が、民衆言語によるネイションの区分という領域的縮小に影響を与えるなど、相互に絡み合っていたとの見通しを得た。

研究成果の概要(英文)：This research examined the tangled transformation and mutual influence of the nobles' nation of the early modern multiethnic composite Polish-Lithuanian Commonwealth and the modern nations of common people emerging in its territory as results of nationalism. It focused mainly on the vertical extension of the nobles' nation into lower estates and its horizontal reduction along linguistic and ethnic borders of common people in the middle nineteenth century. Analyzing the political proclamation and the mobilized range of the November and January Uprisings, and the regionalistic activities of Lithuania and Belarus during the time between these two uprisings, it indicated that though it's not an irreversible or homogeneous process, the nobles' nation once began to include non-Polish-speaking common people, and that it gave a certain impetus to the horizontal reduction and the birth of the modern nations.

研究分野：西洋史

キーワード：西洋史、近代史、ナショナリズム、ポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ロシア、知識人、多言語社会、シンボル

1. 研究開始当初の背景

近世のポーランド=リトアニア「共和国」は貴族を主体とする多宗派・多言語・多文化の複合国家であった。18世紀末のポーランド分割後、近代のナショナリズムや身分制度の崩壊の影響を受けて、20世紀前半までにその地域からポーランド、リトアニア、ウクライナ、ベラルーシという4つの領域的なネイション(政治的一体性を持つ、あるいは要求する共同体)が登場した。

しかし、その過程、特に近世的な貴族のネイションと民衆を含み、その言語に基盤を置く近代的ネイションとの関係については従来十分な検討がなされてこなかった。その理由には、各国史の枠組みにとらわれてそれらのネイション同士の相互関係を検討する視点や全体を見る視点が希薄であったこと、ならびに現在のポーランド以外の領域においては近世にポーランド化した貴族が民衆中心のネイションと切り離されて捉えられていたことが挙げられる。

こうした中で J. バルダフは、貴族に限定されるもののエスニックには開放的な近世のネイションから、全社会層を含むがエスニックには排他的な近代のネイションに変化したと概観した(Juliusz Bardach, *O dawnej i niedawnej Litwie*, Poznań, 1988)。また、T. スナイダーはリトアニアやベラルーシ、ウクライナの反貴族・反ポーランドの民衆ナショナリズムが分割前から続くポーランドの高文化の遺産を受け継いでいることを多くのパラドクスとともに示した(Timothy Snyder, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569-1999*, New Haven, 2003)。これらの研究は旧「共和国」を一体的に捉える重要性を示す一方で、個別具体的な検討という点では課題を残していた。

これまでの自身の研究においてはバルダフやスナイダーの研究で示された見取り図を参考にしながら、ポーランド化した貴族が非ポーランド語話者を中心とする民衆を支配していた旧リトアニア大公国地域(現在のリトアニアとベラルーシ)を主たる対象として、ポーランド分割から1830年までの時期に関して、政治的・文化的・社会的文脈から国家像やネイション概念、その文化的・歴史的表象について、具体的な事例の検討を重ねてきた。しかし、政治的ロマン主義が始まり、また身分制度に基づいた社会が徐々に変化していく19世紀半ば以降については詳細な検討を行うことができていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、近世のポーランド=リトアニア「共和国」が4つのネイションへと変貌する過程で、貴族を中心とするネイションの垂直的な拡大(下位身分・社会下層への拡大)が、異なる言語・宗教集団の排除という領域的・水平的な縮小といかに絡み合いながら進展

していったのかを考察する。換言すれば、多言語性や地域的複合性を特徴とする旧「共和国」地域において、貴族や知識人が主導した「共和国」単位のナショナリズムによる民衆統合と、民衆の言語に基盤を置こうとした他のナショナリズムの覚醒・展開との関係を問うのである。

具体的には、旧「共和国」領で起こった反ロシアの十一月蜂起(1830-31年)と一月蜂起(1863-64年)およびその間の時代の地域主義的な文化・学術活動を取り上げて上記の課題を検討する。これによって政治的な独立運動におけるネイション観や国家像を把握するとともに、平時の認識における文化的・社会的な面での民衆のネイションへの統合についても考察する。対象とする地理的範囲は、ロシア帝国に併合された旧「共和国」地域のうちポーランド王国と旧リトアニア大公国地域であり、時間的な制約によりウクライナ地方は割愛する。

本研究は、これによって得た研究成果を足掛かりに今後ロシア帝国で農奴制が廃止される1860年代以降についても研究を進め、エスノ・ナショナリズムが主流とされがちな東ヨーロッパのナショナリズム像の修正を試みるという展望を有する。

3. 研究の方法

(1) 本研究で必要な資料の中には国内に所蔵されていないものも多い。そのためポーランド、リトアニア、ベラルーシの文書館・図書館ならびに帝政ロシア時代の資料を抱負に所蔵するフィンランド・ヘルシンキ大学図書館にて資料を収集した。また各国の歴史研究者へのインタビューを行ったり、アドヴァイスを受けたりしたほか、意見交換も行った。

2013年は一月蜂起勃発150周年であったことから、海外出張の際にポーランド・リトアニア・ベラルーシ各国における蜂起についての記念の在り方と蜂起に関する社会の歴史認識についても検討した。

(2) 研究の視角は以下である。

分割後も政治的・文化的・社会的な枠組みとして機能した旧「共和国」の枠組みを重要視した。そのうえで、ロシア帝国という同時代の政治的・制度的枠組みや、旧「共和国」内部の地域的複合性についても留意した。

19世紀半ばの時点では、ポーランドを含めた4つの近代ネイションは未だ確立されていないという立場に立って、ネイション間あるいは身分・社会層の間の境界線を流動的に捉えた。さらに近世的な旧「共和国」のネイションと近代ネイションが併存していた可能性も含めて検討し、それらが相互関係の中で変容していく過程を一体的に扱った。

・ の立場に加えて、各国の研究を参考することにより、一国史的なアプローチに偏ることなく、領域全体を一体的に捉えるよう努めた。

(3) 分析対象には政治的な事象と文化・社

会的な事象の双方を用い、それらを統合して当時のネイションの垂直的・領域的範囲を検討した。

政治的な事象として分析したのは、十一月・一月両蜂起の際に議論・提示された国家像（特に政治形態や連邦制の問題）や非シュラフタ身分の権利や地位の問題、動員対象や蜂起参加者の身分的・地理的範囲、またその際に用いられた歴史的・文化的なシンボルなどである。特に農民の動員に関しては、農奴解放などのネイションの下方拡大と見なせる事例の有無や、非ポーランド語話者に対する動員用プロパガンダ等に注目した。

文化的・社会的事象としては、両蜂起間の時代の平時における地域主義的活動を取り上げた。比較的まとまった資料のある、十一月蜂起敗北後西欧に亡命者した者のあいだでのリトアニアやルーシの地域主義の問題と、ポーランドの高文化とリトアニアやベラルーシの民衆文化の境界域、すなわち身分・階層、言語、宗教、地域に関して境界域を生きた人物に焦点を絞った。

4. 研究成果

(1) 政治的な事象に関する分析

十一月蜂起・一月蜂起ともに分割前の旧「共和国」領のロシアからの独立を目指す蜂起であったが、異なる点もあった。

十一月蜂起はロシア皇帝が国王を兼ねるポーランド王国の立憲制が有名無実化したことに対する抵抗と、その帰結としての独立運動であった。蜂起の端緒は青年将校の地下活動によって開かれたが、抵抗活動や蜂起の主体はポーランド王国の議会や議員、政府などであり、分割前の貴族共和政的な制度的基盤の存続とそれを担った人的連続性がある程度看取できた。またロシア西部諸県を形成していた旧リトアニア大公国地域での蜂起の組織化にも、郡単位での蜂起部隊の結成や連盟など、旧来の貴族による地方自治や伝統的政治手段が活かされていた。そのため、当初の研究予定にはなかったが、貴族共和政的政治制度の継続や人的連続性の点からは、ポーランド史の時代区分として 1795 年の第三次ポーランド分割ではなく 1830/31 年を一つの画期とする考えも支持しうるが示された。

すでに十一月蜂起以前にポーランド語の文学潮流としてのロマン主義が始まり、それによって文化的には非ポーランド語話者を含む民衆への関心が高まっていた。だが、蜂起左派の主張にもかかわらず、蜂起政府が全体として農奴の解放や負担軽減、国民軍としての農民の動員を行うことはなく、少数の蜂起部隊によって蜂起への参加と引き換えに農奴の賦役廃止が示されるに留まっていたことが指摘できた。

また、ポーランド王国側はロシアとの戦線拡大を避けるという現実的な理由から蜂起の拡大に慎重であったのに対して、リトアニ

アやルーシの貴族がポーランド王国の独立運動への参加・合同の再開を積極的に要請したことが分かった。

一月蜂起は、十一月蜂起後の社会経済的な変化やロシア大改革期の対ポーランド政策の緩和、農奴制改革の議論を受けて生じた。ポーランド王国で始まってロシア西部諸県にも広がった、市民による愛国的示威行動とそれに対するロシア官憲の弾圧による被害者を悼む愛国的なミサ、さらに農奴制廃止の条件をめぐる起こった農民騒擾などを背景にして、直接的にはポーランドの左派・革命派の知識人らが起こした蜂起に、その後、穏健・保守の貴族らも加わって展開した独立運動であった。旧ポーランド＝リトアニア「共和国」領全体に広がった貴族主導の最後の独立運動として位置付けられる。

蜂起前から愛国的示威行動に民衆が参加し、また K. カリノウスキら左派の活動家によっても民衆言語によって農民への宣伝活動が行われるなど、政治的活動は非シュラフタ身分へも一定の広がりを見せていた。当時の社会状況からもより多くの身分・社会層の支持の獲得が蜂起側の喫緊の課題となり、蜂起政府は農奴解放宣言を出したほか、A. マツケヴィチュスらカトリックの聖職者を通じた非ポーランド語地域を含む農民の蜂起への動員（と領主に対する農民反乱の防止）なども行われた。だが、シュラフタを中心とする蜂起政府の農奴解放問題に対する足並みはそろわなかったことから、広範な農民の動員は成功せず、特に正教地域の農民の参加は限定的であった。またカリノウスキらの活動にも旧来の貴族を中心とするパターンリスティックな農村秩序の維持が見て取れた。最終的に、蜂起に対抗してロシア政府が農民により有利な解放の条件を示したことから、蜂起側が農民を取り込む試みは失敗に終わる。

しかしながら両蜂起において、自由農が多かった現リトアニア西部のジェマイティヤ地方では他地域と比べて多くの農民が自発的に蜂起に参加し、農民出自の部隊指揮官も存在した。またこのことが貴族によっても好意的に捉えられていた。一方で分割前の 1794 年のコシチューシコ蜂起では十一月・一月の両蜂起よりも積極的に農民動員を目指して農奴解放を宣伝していた。以上から、一月蜂起までの時期では、近世の貴族に限定されていたネイションが社会下層へ垂直的に拡大する過程は大きな地域差や個人差を伴って展開され、また単線的・不可逆的に展開したわけでもないことが明らかとなった。

領域的な点に関しては、1772 年の第一次分割を受ける以前の旧「共和国」領の範囲での、ポーランドとリトアニア、一月蜂起ではさらにルーシ（ウクライナ）の連邦による独立が想定されていた。一月蜂起においては、ポーランド以外の民族への配慮の必要性も指摘されていた。だが、これらのポーランド以外

の連邦を担うネイションの主体も貴族であり、分割前の地域的な複合性に基づく考えであった。旧「共和国」内の他の言語・宗教集団は、当時は他の民族というより主として領主・地主と農奴・農民という身分・社会層の差として認識されていたと考えられる。

(2) 両蜂起間の文化的・社会的事象

十一月蜂起敗北後にフランス等の西欧に亡命した者にはロシア西部諸県出身者も多く、亡命直後から「リトアニア協会」(翌年「リトアニア・ルーシ地域協会」と改組)が結成され、それらの地域に関する知識やそれらの地域での蜂起の展開について伝え、顕彰し、関連資料を保存・公刊する活動に従事した。この会はポーランド王国のポーランド人によるリトアニアやルーシ出身者への偏見や不当な扱いに抗議し、自らが統一されたポーランドを望み、蜂起の際にも大いに貢献したことを強調する傾向にあった。その中ではリトアニア語を話す農民の蜂起への参加も誇らしげに指摘された。

だが彼らはリトアニアやルーシの出身者であってもシュラフタが中心だったため、他言語・他文化を背景に持つ民衆を排除しないものの、ポーランド文化を共有するエリート中心の統一国家を支持する運動へと収斂した。

リトアニア語とポーランド語の境界を生きた人物として、歴史家S・ダウカントスやジェマイティヤ司教M・ヴァランチュスに注目した。ダウカントスはポーランド語で書かれたリトアニア史の影響を受けながらもリトアニア語話者の民衆を中心とした歴史を描き、それがのちのリトアニアのナショナル・ヒストリーに大きな影響を与えた。

ヴァランチュスはカトリック教会でのリトアニア語による説教の導入やリトアニア語学校の設置など、リトアニア語の地位を向上させ、教区の農民を禁酒運動や一月蜂起敗北後のラテン文字によるリトアニア語出版物の密輸に動員した。だが、それはカトリック信仰護持のための教会への民衆の取り込みという側面を持ち、彼は蜂起路線とは一線を画したものの、必ずしもリトアニアの近代ナショナリズムとは同一視できないこと、ただしその後のナショナリズムで用いられる民衆動員の様々な回路を準備したことが分かった。

ベラルーシとポーランドの言語的・文化的な境界に関しては、J・チェチョトやV・ドゥニン＝マルチンケヴィチのような、ポーランド語あるいはバイリンガルの中・下層エリートによるベラルーシ民衆文化への文学的・芸術的関心と、ポーランド文学の翻訳を通じたベラルーシ文学確立の試みが並行して、またときに同じ人物によって行われたと指摘した。ベラルーシ語での執筆・翻訳を行ったマルチンケヴィチは同時に民衆向けの学校を開き、蜂起を支持する立場をとっていたことが分かった。このことから、少なく

とも受動的なレベルでは他言語の民衆をネイションの範囲に加えていた者が旧ポーランド＝リトアニア領全体での統一を望む者の中にいたことが分かる。

一方で、ポーランドからのベラルーシの分離やその地域的な範囲の特定、正教信仰や古ルーシ以来の伝統の強調には、ロシアによる西ルーシ主義(旧リトアニア大公国は西ルーシの国家であり、ロシアに帰属すべきであるという考え)が大きな影響を与えていたとの見通しも得た。

(3) 以上の研究成果は19世紀半ばのネイション像について概略を示すものでしかなく、未だ考察すべき点が多い。とはいえ、予想されたように近世的ネイションと近代の4つのネイションが絡み合いながら変容を遂げた過程の一端が看取できた。また蜂起という政治変動におけるネイション観と平時の文化的・社会的活動におけるそれを合わせて検討することで、当時の既存の枠組みであるロシア帝国支配下の制度、地域エリートである旧「共和国」貴族の独立運動、近代民衆ナショナリズムの先駆けと見なされる知識人の細分化された地域主義的活動の3層の関係を考察し、政治や身分制度の側面から見たネイションの範囲と文化的なシンボルや内部の社会的障壁という点からみたネイションの範囲とのあいだにしばしば齟齬があることを指摘することができた。

本研究の成果は、ヨーロッパのネイションの東西比較によって東欧のネイションをエスニック型と位置づけたH・コーンに代表される議論や、他国の支配下にあった中東欧の小規模ネイションによるナショナリズムの類型化を行ったM・フロホの説などと比較検討することでナショナリズム研究に新たな知見をもたらす可能性を有している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

梶さやか「自らについて書くということ 19世紀ポーランド＝リトアニア領における貴族の手稿」国際シンポジウム「無名な書き手のエクリチュール」2014年12月21日、岩手大学(岩手県・盛岡市)

〔図書〕(計 4 件)

梶さやか、群像社、『ポーランド国歌と近代史 ドンブロフスキのマズレク』2016年、132頁

Sayaka Kaji et al., The Lithuanian Institute of History, *Kintančios Lietuvos visuomenės: struktūros, veikėjai, idėjos*, 2015, pp.138-149

梶さやか ほか、岩手大学人文社会科学部
国際文化課程欧米言語文化コース、『欧米言
語文化論集 II』2015 年、29-40 頁

梶さやか ほか、昭和堂、『ロシア帝国の
民族知識人 大学・学知・ネットワーク』2014
年、担当 48-73 頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

アウトリーチ活動

梶さやか「国歌と賛歌でたどるポーランド
史」2016 年度フォーラム・ポーランド会議
キリスト教ヨーロッパにおけるポーラン
ドの 1050 年、2016 年 12 月 10 日、青山学
院大学（東京都・渋谷区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶さやか（KAJI, Sayaka）
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：70555408

(2) 研究分担者

なし（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし（ ）

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし（ ）